

平成30年度 学校評価 (最終評価)

石川県立小松工業高等学校

重点目標	具体的取組	評価の観点	達成度判断基準	評定	分析と次年度に向けての課題
1 主体的・対話的で深い学びにつながる授業の実践を通して、基礎的・基本的な知識と技能の定着を図るとともに、問題発見力・問題解決力・創造力等の育成を図る。	① 生徒の基礎学力の定着と授業規律の確保を目指す。ALやPBLを取り入れた能動的な授業改善に取り組む。また、中高連携・高大連携研修、教師相互の授業参観、研究協議会等を通じて授業力の向上を追求する。	<努力指標> 相互の授業参観を行い、積極的にアドバイスを行うことにより、授業力の改善を行う。	年間5回以上教師相互の授業参観を行うとともに、授業改善に努めた教員が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A	すべての先生が、授業参観し、5回以上授業参観した人数は52名の88%であった。次年度においても、研究授業や公開授業を数多く計画し、その機会を活用し、授業改善に努めていきたい。
		<努力指標> ALやPBLを取り入れ、生徒が主体的・能動的に学べる授業に取り組む。	ALやPBLを取り入れ授業改善に取り組んだ先生の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	A	授業改善報告において、ALを取り入れた先生は92%であった。次年度においても、継続的にALを取り入れた授業改善に取り組むように、研究授業や授業研究会を複数回実施したい。PBLは工業科を中心に実施しているが、すべての教科での実施を目標に取り組んでいきたい。
	② 学カスタンダードを活用し、地域に求められる質の高い学びの実現を目指す。	<満足度指標> 各教科の指導により、専門科目の知識が身についたと感じる。	授業により、知識が身に付き、課題を発見する力、解決する力がついたと感じている生徒が、 A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A	知識の習得について、身についたと感じている生徒が、87%であった。次年度においても、今年度導入した大型モニターなどICT機器の活用を推進し、わかりやすい授業を展開するとともに、ALの視点を取り入れた授業によって、課題発見・問題解決する力の育成に努めていきたい。
学校関係者評価委員の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・自校の教員相互の授業参観だけでなく、他校の授業参観等でも授業改善を行っていることは良い。今後も実施してほしい。 ・ALを取り入れた授業の中で、理解できた生徒ができない生徒に教えていた。教えあうことで、お互いに知識の深まりができた。 			
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善方策		<ul style="list-style-type: none"> ・今年度、教育ウイークに他校の授業参観を若手教員を中心に実施した。今後は、高校だけでなく中学校へも参観し、教員の授業力向上に取り組んでいく。 			
2 ものづくりによる実践的な技術・技能の習得や、デュアルシステム等の体験的学習に積極的に取り組み、地域に貢献できる人材の育成と個々の生徒の適性に応じた進路の実現を図る。	① 専門高校における知識・技能の習得のパロメーターである資格取得・検定合格に向けて積極的に取り組む。また、ものづくりの技術を向上させ、各種大会等で成果を上げる。	<成果指標> 資格・検定指導を推進し、ジュニアマイスターの認定者を多く輩出する。	ジュニアマイスターシルバー以上認定者、および認定者同等のポイントを有する人数が、 A 60名以上である。 B 50名以上である。 C 40名以上である。 D 40名未満である。	A	ジュニアマイスター申請者の数は1月末現在、特別表彰2名、ゴールド30名、シルバー43名の合計75名であった。資格取得に対する指導体制の充実や資格取得への啓発により昨年度の50名対して150%に達した。生徒が資格取得に前向きになれるような指導を心がけていきたい。
		<満足度指標> 各教科の指導により、専門科目の技能が身についたと感じる。	授業により、専門科目の技能が身に付き、課題を発見する力、解決する力がついたと感じている生徒が、 A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A	専門科目の技能の習得について、身についたと感じている生徒が昨年度に引き続き90%代であった。さらに多くの生徒の技能習得にむけて、指導方法の改善・工夫をすることで満足度を高め、生徒の学習意欲を育てていきたい。
		<成果指標> ものづくり大会やロボットコンテスト等のコンテストにおいて上位進出を目指す。	今年度のものづくり大会やロボットコンテスト等のコンテストにおいて A 全国大会で上位に入賞することができた。 B 全国大会に出場することができた。 C 北信越大会に出場することができた。 D 県大会出場にとどまった。	B	ものづくりコンテストでは、6部門中5部門(旋盤部門、電気工事部門、電子回路部門、木工加工部門、化学分析部門)で優勝し、北信越大会に出場した。また、ロボットコンテストは県大会で優勝し、全国大会にした。さらに、ロボットアメリカンフットボール大会では県大会で2位となり全国大会に出場した。
	② 進路実現を確実なものとするため、インターンシップ、デュアルシステム等の体験的学習を全科積極的に取り組むとともに、学習の習慣化を図り、基礎学力の充実・定着を図る。	<努力指標> 学習と部活動の両立を目指し、気概と努力が大切であると実感させる。	学習と部活動を両立できたと答える生徒が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	B	学習と部活動の両立について努力している生徒は、1年生が73%、2年生が68%、3年生が70%、全学年で70%であった。昨年度と比較すると全体として1%上昇したが、2年生の割合が4%低下した。2年生は学校生活にも慣れたが、やや文武両道に苦戦している。しっかりと学習と部活動の両立に努めるよう部活動の取り組み方や生活習慣の確立等について指導していきたい。
学校関係者評価委員の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・教師間での技術継承がうまく行っていることで、各種大会において優勝するなど、成果がでていたと感じた。 ・各種コンテストや大会に取り組む教師の姿に生徒が共鳴し、生徒が主体的に取り組む姿が伺えて良かった。 			
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善方策		<ul style="list-style-type: none"> ・働き方改革を進めながらも、資格取得・ものづくりコンテスト等指導の充実により、専門高校としての実践的な技術・技能の習得や地域に貢献できる人材の育成に努め、生徒の適性に応じた進路実現を図る。 			

平成30年度 学校評価 (最終評価)

石川県立小松工業高等学校

重点目標	具体的取組	評価の観点	達成度判断基準	評定	分析と次年度に向けての課題
3 「学警連携」「部活動の活性化」「教員の組織連携強化」「校内研修の充実」等を通して、生徒の規範意識やマナーの醸成を図り、生徒にとって安全・安心な学校作りを目指し、社会人として必要な人間力を備えた人材の育成を図る。	① 生徒が積極的に部活動に参加し、県内外で成果をあげることで、周囲の期待に応えられるよう、部活動の活性化に取り組む。	<成果指標> 3年間継続して、部活動に参加する。	3年間部活動に参加していた生徒が、 A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	B	3年間部活動を継続した生徒は86%であった。1、2年生で土台をしっかりと作り上げられるよう活動を充実させていきたい。 (2年生加入率：95%)
		<成果指標> 県内での上位進出の状況を見る。	県総体の成績で団体、個人ベスト4以上の種目が A 10種目以上あった B 7～9種目であった。 C 4～6種目であった。 D 4種目未満であった。		
	② 品位ある服装、爽やかな挨拶、時間厳守など、進路実現に直結する生活姿勢の改善に生徒自らが意識して取り組むよう指導する。また、学警連携を密にするとともに、学年集会やおもてなし講話、警察署による講話等を通して安全・安心な学校及び生徒の規範意識の確立に取り組む。	<成果指標> 遅刻件数の前年度比から判断する。	前年度と比較し、遅刻件数が A 25%以上減少した。 B 15～25%減少した。 C 5～15%減少した。 D 5%未満であった。	B	10月実施の自治委員を活用した取り組みである「遅刻防止週間」により、昨年度より23%減少できた。次年度は、「遅刻防止週間」を1学期に1回増やし「年2回」の取り組みにより生徒の生活習慣の確立に努めていきたい。
		<成果指標> 自転車交通違反指導件数から判断する。	前年度と比較し、違反件数が A 30%以上減少した。 B 20～29%減少した。 C 10～19%減少した。 D 10%未満であった。		
		<満足度指標> 生徒の自己評価から判断する。	自ら進んで挨拶できたと答える生徒が、 A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A	自ら挨拶ができると答える生徒は84%であった。昨年度の81%に比べると今年度は若干上昇した。社会における挨拶の大切さとその役割を職業教育や、挨拶・5S等のキャリア教育をとおしてさらに指導していきたい。
		<努力目標> 生徒の状況を的確に把握し、生徒一人一人の成長に応じた指導に努める。	生徒情報を共有し、共通理解のもと生徒に寄り添った指導を心がけた教員が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。		
学校関係者評価委員の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・自転車交通違反件数が多いのは、重大な事故につながる可能性があるのだからしっかり指導してほしい。 ・挨拶は、他校に比べ、声に張りがあり、印象はよい。 			
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善方策		<ul style="list-style-type: none"> ・学警連携を密にし、下校時間帯を中心とした校外指導を強化するとともに、生徒・保護者に対して生命を尊重する具体的な態度をあらゆる機会を捉えて発信し、交通違反に対する意識の改善を図る。 			
4 全職員が5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)に努め、ムダの削減・見える化・業務の平準化を推進することで業務効率化を図る。	① 職員が5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)の意味と進め方を共有する。重点的に2S(整理・整頓)を進めることで見える化を進め、業務のムダを削減する。	<努力目標> 必要性・使用頻度に応じ整理・整頓を行い業務効率化に取り組む。	5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)の意味と進め方を理解し、物品や電子データ等の2S(整理・整頓)を行い業務効率化に取り組んだ職員が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	A	5S活動に取り組んだ職員は92%であった。また、5Sが時間の短縮や業務改善に反映したと感じた職員は65%であり、5S活動が業務の効率化につながっていることがうかがえる。また、5S活動への意識が高まった職員は77%であり、5S委員会の活動を通して、職員の更なる意識改革に努めていきたい。
		学校関係者評価委員の評価			
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善方策		<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に比べ、意識改革は進んでいるが、更なるムダの見直しを図るとともに、5S委員会の活動を通して、職員の更なる意識改革に努めていきたい。 			